

## アラビア語学の成果とアラビア語教育の連携 —名古屋外国語大学における実践例—

Toward the Cooperation between Arabic Linguistic Studies and  
Arabic Class Guidance:  
A Practice at Nagoya University of Foreign Studies

下村佳州紀  
Kazuki SHIMOMURA

アラビア語は難しい言語だと言われる。例えば、米商務省は言語難易度の格付を報奨制度に反映させているが<sup>1</sup>、【表1】に示すようにアラビア語、中国語、日本語、朝鮮語は栄えある「最難関言語」に分類されている。このうち、漢字を用いる中国語、言語的に近い朝鮮語は日本人にとって難易度が下がり、日本人にとってアラビア語の難しさがなおさら際立つことになるが、難解さには理由があるはずである。以下では、主に本邦におけるアラビア語学の成果を踏まえ、アラビア語を学ぶ心構えから、文字と発音、語彙、文法、表現などの特質に触れつつ学習の要点を探る。

なお、複言語教育の一環である本学のアラビア語授業は一週間に文法1コマと筆者担当の会話1コマの計2コマで一般的な「第二外国語」と同様であるが<sup>2</sup>、履修年限が初級・中級・上級の三年間と比較的長く、履修者数は10名以内と個別指導を行える恵まれた環境にある（2017年度）。

### 1. 動機付け

外国語の習得には時間がかかるが、それがいつ必要になるかも判らないままに事前の努力が求められるという困難がつきまとう [千野 1986: 20-21]。これを乗り越える手段が動機付けである。

## 【表 1】米商務省言語難易度格付

第1類 国際言語 (World languages) 英語とほぼ同族の言語

習得所要時間：24-30 週間 (600-750 授業時間相当)

1. デンマーク語 (24 週)
2. オランダ語 (24 週)
3. フランス語 (30 週)
4. イタリア語 (24 週)
5. ノルウェー語 (24 週)
6. ポルトガル語 (24 週)
7. ルーマニア語 (24 週)
8. スペイン語 (24 週)
9. スウェーデン語 (24 週)

第2類 第1類よりも習得に若干時間がかかる言語 習得所要時間：36 週間 (900 授業時間相当)

1. ドイツ語 (36 週)
2. ハイチクレオール語 (36 週)
3. インドネシア語 (36 週)
4. マライ語 (36 週)
5. スワヒリ語 (36 週)

第3類 難関言語 (Hard languages) 英語とは顕著な言語的・文化的相違のある言語

習得所要時間：44 週間 (1100 授業時間相当)

1. アルバニア語
2. アムハラ語
3. アルメニア語
4. アゼルバイジャン語
5. ベンガル語
6. ブルガリア語
7. ビルマ語
8. チェック語
9. ダリー語
10. エストニア語
11. 現代ペルシア語
12. フィンランド語
13. グルジア語
14. ギリシア語
15. グジャラート語
16. ハウサ語
17. ヘブライ語
18. ヒンディー語
19. ハンガリー語
20. アイスランド語
21. カザフ語
22. クメール語
23. クルド語
24. キルギス語
25. ラオス語
26. ラトビア語
27. リトアニア語
28. マケドニア語
29. モンゴル語
30. ネパール語
31. パシュトー語
32. ポーランド語
33. ロシア語
34. 𑌖𑌒𑌔𑌕 = 加アア語
35. シンハラ語
36. スロバキア語
37. スロベニア語
38. ソマリ語
39. タガログ語
40. タジク語
41. タミール語
42. テルグ語
43. タイ語
44. チベット語
45. トルコ語
46. トルクメン語
47. ウクライナ語
48. ウルドゥー語
49. ウズベク語
50. ベトナム語 (原注：リストは網羅的ではない)

第4類 最難関言語 (Super-hard languages) 英語を母語とする話者にとって格別に難しい言語

習得所要時間：88 週間 (2200 授業時間相当)

1. アラビア語
2. 中国語 (広東語および北京語)
3. 日本語
4. 朝鮮 [韓国] 語

---

[凡例] 網掛けは本学の複言語プログラム対象を、下線は国連公用語をそれぞれ示す。

[出典] <https://www.state.gov/documents/organization/247092.pdf> (2017年10月20日閲覧) より筆者作成

英語学習の有用性はたとえ漠然とであれ広く信じられ、また経験に裏付けられてもいる。一般に、西洋諸語の魅力は実用性と文明力にある。アジアに目を転じれば、「経済発展の著しい国々の言語」<sup>3</sup>が選好される他、中国語は国連公用語でもある。

他方アラビア語は確かに国連公用語であり、また本邦の原油輸入先の約87.2%が中東(GCCとイラク)だが<sup>4</sup>、幅広い交流はなく、アラブ文学、芸術、映画は未知の領域である(なお、アラビアンナイトはインドやペルシアの説話を起源とする)。アラブ圏の商取引では英語がそれなりに通用する。平均的で陳腐な内容であれば機械翻訳でもよい[隅田 2017: 64]<sup>5</sup>。このように、アラビア語学習の魅力は自明でない。なぜ苦勞して言語を、しかもアラビア語を学ぶのか、履修以前に考える機会や材料が多く提供されるべきだ。参考までに、筆者の考えを以下に述べる。

1. 英語の深い理解には欧州諸語が役に立つが、内部屈折型のアラビア語は印欧語族ともアルタイ諸語とも異質であり言語を広い観点から理解するために有益である[千野 1986: 206]。

2. 語学学習とは発想法の学習でもある。言葉がなければ何かを「考える」ことはできず、他言語の習得は新たな発想法を与える。例えばアラビア語では挨拶を交わした後、「ご機嫌いかがですか」などしばらく相手とその周辺を気遣い、それから要件に入る。半ば習慣化しているものの、これは相手自体を人間として重視していることの表明である。そもそも、アラビア語の挨拶の大半は祈願文であり、「挨拶」(taḥīyah)の語源はḥayyāka Allahつまり「アッラーがあなたたちに生命力(ḥayāh)を与えますように」との祈願である。

3. 語学を学ぶことは異文化への敬意を示し、引いては相手に寄り添うことを意味する。最近では岩井文男イラク駐箚日本国大使がFacebookやYouTubeを使いアラビア語によってイラク国民との直接的な交流を図り、成功している<sup>6</sup>。もちろん、イラクでの従前からの親日感情や外交団への一般的敬意を差し引かねばならないが、やはりアラビア語の使用による異文化へ敬意が成功の秘訣である。傷ついた人々に寄り添うには英語では少し余所余所しい。

4. オスマン史家の鈴木董は文明の区分として、世界を漢字圏、ナーガリー文字（梵字）圏、「新疆ウイグル自治区・パキスタンからモロッコまで」拡がるアラビア文字圏、ギリシア・キリル文字圏、ラテン文字圏の五文字圏に分けることを提唱しており、各文字圏の内部では文化・学術・技術を担う文明語・文化語の共有、庶民においても共通の借用語を通じた概念・観念の共有が見られ、文字圏内の各社会の基本的価値体系に影響を及ぼしたという [鈴木 2000: 23-25]。西洋におけるギリシャ語、ラテン語と同様に、アラビア語はイスラーム圏の古典語である。「アッ=サラーム・アライクム」との挨拶は全イスラーム圏で通用する。ペルシア語やトルコ語にはアラビア語からの借用語も多い。現代でもアラビア語はクルアーン（コーラン）とハディース（預言者の言行録）の理解に不可欠であり、イスラームの宗教学者（宗教者）の共通語でもある。なお、聖書や仏典とは違い、クルアーンの翻訳は正文とは見なされずオリジナルへの強い拘りがある。

5. ギリシア科学を継承してアラビア科学が発展し、西洋に伝わったように [伊藤 2006: 165-166; 伊藤 2007: 241]、アラビア語は学問を支えてきた。また、共和制諸国では独立運動がアラブ民族主義によって担われたため、アラビア語教育が国是となった [池田 1976: 1-2]。君主制諸国もいたずらに欧化政策をとらなかった<sup>7</sup>。それもあってか「英語で通じ合えることがエリートのサイン」、「英語が流暢か流暢でないかによって、階層が作り出されている」、「インテリが読む言語は英語で、それ以外の人を読むのが現地語」 [水村 2017: 28] との言語の植民地化現象は未だ顕在化していない。

6. アラビア語は多数の話者を抱え、情報の発信と吸収も活発である。まず、話者数では中国語、スペイン語、英語に次ぐ第4位を占める。また、ウェブサイトで使われる言語についても、南アジア、東南アジア、アフリカ（但し英語圏）の殆どの国々では英語が圧倒的多数派であるのに対し、アラビア語圏ではアラビア語が過半を占める。ウィキペディア上での工学・医学用語の項目充実度も、英、独、仏、露、伊、西、日、ポーランド、葡、アラビア、中、ウクライナと10位につけている [三上 2017: 44-45, 47-48, 55-57]。

7. 語学学習は登山に似る。険しい「アラビア山」は山頂到達時の感慨もひ

としおであろうし、登山技術や体力は一生の宝である。エベレストの踏破は驚異であるが、アラビア山の制覇は遙かに安全で容易である。そして、物珍しさとしてはエベレスト級である。

8. アラビア語の学習機会は限られており、また中高年になってから始めるのは困難である。学習環境と若さが与えられていることは学生の特権である。

9. 「英・独・仏・露など有力な言語と比べて、少数の人に話されるその他の言語を学ぶことは、辞書・教科書・教師などあらゆる面で困難が山積みしている。ただ一つの利点は希少価値である。しかし、本当のところ、いやないい方だがいわゆる『特殊言語』を学ぶことは労多くして報われるところが少ない場合が多い」[千野 1986: 210]との指摘は誠実である<sup>8</sup>。同時に、希少価値は時と場合に応じて大化けする。手前味噌で恐縮だが筆者が大使館幹部の訾訶に触れ得たのも、当時の写真が『平成16年版(2004年)外交青書』<sup>9</sup>に公開されたのもアラビア語の希少価値ゆえに他ならない。

とりあえずこれだけの理由があれば十分だろう。ただ、アラビア語学習は意欲があれば達成できるものではない。学習者が直面する問題について、これから見ていく。

## 2. 文字と発音

日本人は漢字、ラテン文字以外の文字体系には馴染みが薄い。アラビア文字については、右から左に書くことが知られ、俗にミミズのぬたかったような文字と形容される。一部の教科書には読み仮名が振られているが、仮名付に頼っている上達は望めない。集中的な学習が必要だが、習うより慣れろという高い壁である。

他方、数字は直ぐに覚えられるので、達成感が得られる。ゼロはインドで発見されゼロを用いた表記法もインド起源であるため、アラブはアラビア数字をインド数字と呼び、我々の用いるヨーロッパ経由の算用数字(アラビア数字)とは外見も異なる。【表2】に示したインド数字の暗記術は経験上有効である。

【表2】 インド数字とアラビア数字

インド数字 覚え方	
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9	
・ ١ ٢ ٣ ٤ ٥ ٦ ٧ ٨ ٩	
・ なにもないのがゼロ	・ 0
・ 70度回転	٢ 2
・ 70度回転	٣ 3
・ 30度傾斜&補助線	٤ 4
・ 丸い部分に注目	٥ 5
・ 170度回転&補助線	٦ 6
・ 数字の7に相似	٧ 7
・ 漢字の八に相似	٨ 8
・ 左から右に書く	2017 → ٢٠١٧

出典:筆者作成

次にアラビア文字自体の学習に進まなければならない。アラビア文字には、①大文字と小文字の区別、②活字体と筆記体の区別がなく、③右から左に横書きされ、④子音のみを表し、⑤短母音は補助記号によって、⑥長母音・二重母音は alif (ā)、wāw (ū ないし aw)、yā' (ī ないし ay) によって表される。また、アラビア文字の難しさは、①文字に馴染みがなく、②文字の配列順が恣意的で、③文字同士が繋がる際に形が変化することによる〔東長 2002: 26-27〕。

文字学習法については、文字配列の規則性や基準線と文字の続け方との関係性が助けになるものの〔東長 2002: 27-34〕、基本は慣れである。アラビア文字文化圏と漢字文化圏は「字体・字形の規範があつてはじめて成立する」<sup>10</sup> 書道文化を共有している。一見書き殴られたような筆跡にも一定のルールが

存在する。この手書き書体のもととなるのがルクア書体であり [新妻 2009: 16]、学生に書体見本を配付し書き順も含めて指導する<sup>11</sup>。手書き文字を覚えないと書き取りが苦痛になるからである。

次に発音である。アラビア語の子音は28種であるのに対し、母音は3種のみと極端に少ない [牧野 1979: 65-68]。母音が少ないのはありがたいが、子音のうち *t, d, s, z* (強勢音)、*q, kh, gh* (口蓋垂音)、*h, ʿ* (咽頭音)、*ʾ* (声門音) は発音が難しい [池田 1976: 5-7]。ただ、別売カセットテープが高価であった時代と違い、入門書の多くにCDが付いているほか、信頼できる教材も配信されている<sup>12</sup>。

なお、アラビア語の学び始めには二重子音符合であるシャッダの役割を促音として説明する場合も多いが [黒柳 1976: 6; 竹田 2010: 23; 竹田 2013: 13]、やがて学生は本来の二重子音としての機能を忘れてゆく。また、子音の *th, d, dh, t, ḍ* は後続する *t* と同化するのが一般的であり [池田 1976: 9]、例えば *wajadta* は付属CDを含め「ワジャッタ」と発音されるのだが、「ワジャドタ」<sup>13</sup> とルビを振る例が散見され [竹田 2010: 55; 師岡 2012: 131]、混乱を防ぐ必要がある。

### 3. 語彙

語彙と文法は語学習得に必須だが、実用の面からは一般に語彙が優先される [千野 1986: 41-42]。ただし、アラビア語では語彙と文法の繋がりが特に密接である。英単語の場合には、語源、接頭語、接尾語の理解が暗記のコツである [小川 1989]。アラビア語の場合は一段と徹底していて、固有名詞などの一部の例外を除き語彙は語根から派生している。語彙を増やすためには、語根と語彙の関係を知るのが一見迂遠だが王道である。

子音が語の基本的意味を決め、母音はそれに变化を与えるのがアラビア語の特徴である [牧野 1979: 68-69]。そのため語根を覚えれば、語彙を増やせるというのは誇張ではない。例として *k-t-b* から派生した語彙を挙げてみる。*kataba* 彼は書いた、*kitāb* 本・啓典、*kuttāb* 寺子屋、*kutayyib* 小冊子、*kitābah* 筆記・執筆、*kitābī* 筆記的・文語的・啓典の民、*kat ībah* (軍

の) 隊、maktab 机・事務所・〇〇室(秘書室・大臣官房・編集室など)、〇〇店(旅行代理店など)、〇〇局(郵便局など)、〇〇所(職業安定所など)、maktabī 事務的な、maktabah 図書館・書店、mukātabah 文通、istiktāb 口述筆記、kātib 書記・秘書・祐筆・事務員、maktūb 書かれたもの・手紙・運命、mukātib 通信員。

名詞には、女性名詞と男性名詞の別があるが、特に人間以外を示す複数名詞を女性単数名詞として扱うのは慣れが必要である。また、単数形、双数形、複数形があり、複数形には規則複数(語尾複数)、不規則複数(語幹複数)がある<sup>14</sup>。不規則複数とはいっても、たいていは fu‘ulun, fi‘ālun, fu‘ūlun, fu‘alā‘u, fu‘lānun, ‘af‘ulun, ‘af‘ālun, ‘af‘ilā‘u, fa‘ālilu, fa‘ālīlu の 10 とおりに集約される[池田 1976: 31-34; 黒柳 1976: 29-32]。また、アラブ人でも間違うことがある二段変化などは少なくとも最初は大目にみるべきである。

名詞と形容詞の壁が非常に低いのもアラビア語の特徴で、壁というよりは半透膜のようである。「アラビア語では、冠詞のあるなしにかかわらず、すべての形容詞がただちに名詞として機能する」[牧野 1979: 73]。ほとんどの形容詞が名詞として用いられうるし、名詞と同様に語尾複数や語幹複数をもっている[池田 1976: 55; ライト 1987 vol.1: 158-159]。例えば最初期に習う表現に「おはようございます」にあたる “ṣabāḥ al-khayr” がある。直訳すれば「善の朝」[竹田 2010: 45; アルモーメン 2014: 76] であり、khayr が「善」に当たる名詞である。しかし、khayr はそのまま「良い・善い」を示す形容詞であり、さらに後ろに min が付けば「～よりも良い」との比較級としても用いられる[池田 1976: 58]。名詞と形容詞が融通無碍であることに早期から触れておくことが、混乱を防ぎ、暗記の労力を減らすことに繋がる。

形容詞は、「大きい」「小さい」「美しい」などを示す fa‘ilun 型、能動分詞である fā‘ilun、能動分詞強意形の fa‘ālun 型、fa‘ilun 型と fā‘ilun 型の強意形である fa‘ūlun 型、受動分詞である maf‘ūlun 型、色を示す ‘af‘alu 型、「怠惰な」「怒っている」など性格や状態などを示す動詞から派生した形容詞の fa‘lānu 型に大別され[池田 1976: 55-56; ライト 1987 vol.1: 197-204]、fa‘ilun 型と ‘af‘alu 型以外は動詞と密接な関係にある<sup>15</sup>。比較級は男女ともに ‘af‘alu min で表現さ



れ、最上級の形容詞用法は 'af'alu (男性形) と fu'lā (女性形) をとる<sup>16</sup>。

動名詞、能動分詞、受動分詞は各派生形毎に固有の型がある。原形の場合、動名詞は主に fa'lun, fa'alun, fa'ilun, fa'ālatun, fu'ūlun, fu'ūlatun [池田 1976: 157; 黒柳 1976: 66] をとり、fā'ilun が能動分詞、maf'ūlun が受動分詞である。また、「場所と時を示す名詞」は maf'alun, maf'ilun の二種、器具名詞は古典期に mif'alun, mif'ālun, mif'alatun の三種、現代ではさらに fa'ālatun, fi'ālun, fā'ilatun, fā'ūlun, fa'ālun, fā'ūlatun の六種がある [池田 1976: 166-169]。

ここまでの内容を纏めたのが【表3】で、語根の f-ʿ-l 表記に○(点線丸)を併記した。配付時には、語根と語彙の関係のたまかな枠組み、いわばジグソーパズルの外枠に当たると説明する。教科書所載の語彙と語彙体系との関係を示し、恐怖心を払拭するのが目的である。

学生は実用的な語彙・表現を期待しており、今のところ師岡 [2012] が最もそれに叶う単語帳であろう。約1400語を収録し、付録のCDは動詞の完了形・未完了形、形容詞の男性形・女性形、名詞の単数形・複数形を女性・男性の声で録音する他、文法説明こそないものの用例には受動態などの文法的配慮もされている。この一冊をあげれば複言語としては十分な語彙、表現、文法が身につく。

日本の義務教育では漢字、英単語、英文の書き取りを繰り返し行うことから、筆記による暗記法に慣れている。付属CDを併用し、アラビア語の語彙や表現を手と耳で覚えてもらう。提出された課題を元に個別指導する際には、機械的な書写作业となっていないか確認する。

#### 4. 文法

「アラビア語は人為的な規範化が高度にすすんだ言語であるために、これを正しく読んで理解するためには、相当しっかりした文法上の知識が要求される」[池田 1976: v]。つまり、文法からの演繹的な言語であるため一度理解した文法は後々まで役に立つ。一つ一つの積み上げが重要かつ成否を分けるのだが、日本語や英語などと全く違うため取っ付きにくく、最初の壁が高い。例えば、語根のありかが解らなければ辞書を引くことすら覚束ない。た

【表3】名詞・形容詞一覧

男性名詞 規則複数 (語尾複数)	سُونٌ سُونٌ 主格	سِينٌ سِينٌ 属格・对格	女性名詞 規則複数 (語尾複数)	نَاتٌ نَاتٌ 主格	نَاتٌ نَاتٌ 属格・对格
名詞 不規則複数 (語幹複数) ※頻出する もののみ ※全部で 約33の語形	فُعُلٌ فُؤُؤٌ أَفْعُلٌ أَفُؤُؤٌ	فِعَالٌ فِإِأٌ أَفْعَالٌ أَفِإِأٌ	فُعُولٌ فُؤُؤٌ أَفْعَالٌ أَفِإِأٌ	فُعَلَاءٌ فُؤُؤٌ فِعَالِلٌ فِإِأٌ	فُعَلَانٌ فُؤُؤَانٌ فِعَالِيْلٌ فِإِأِيْلٌ
	形容詞	فِعِيْلٌ فِإِيْلٌ	فَاعِلٌ فِإِأٌ مَفْعُولٌ مَفُؤُؤٌ	فَعَالٌ فِإِأٌ أَفْعُلٌ أَفِإِأٌ	فَعُولٌ فُؤُؤٌ فُعَلَانٌ فُؤُؤَانٌ
比較級	أَفْعُلٌ مِنْ أَفِإِأٌ مِنْ	最上級 女性形 単数	فُعَلَى فُؤُؤَى	最上級 男性形 複数	أَفَاعِلٌ أَفِإِأٌ
動名詞 ※全部で約 44の語形	فَعْلٌ فُؤُؤٌ	فَعْلٌ فُؤُؤٌ	فَعَالَةٌ فِإِأَةٌ	فَعُولٌ فُؤُؤٌ	فُعُولَةٌ فُؤُؤَةٌ
能動分詞	فَاعِلٌ فِإِأٌ		受動分詞	مَفْعُولٌ مَفُؤُؤٌ	
場所と時を 示す名詞	مَفْعَلٌ مَفُؤُؤٌ	مَفْعَلٌ مَفُؤُؤٌ	場所と時を 示す名詞 (複数形)	مَفَاعِلٌ مَفِإِأٌ	
器具名詞	مِفْعَلٌ مِفُؤُؤٌ	مِفْعَالٌ مِفِإِأٌ	مِفْعَلَةٌ مِفِإِأَةٌ	器具名詞 (現代)	فَعَالَةٌ فِإِأَةٌ
器具名詞 (現代)	فِعَالٌ فِإِأٌ	فَاعِلَةٌ فِإِأَةٌ	فَاعُولٌ فِإِأُؤُؤٌ	فَعَالٌ فِإِأٌ	فَاعُولَةٌ فِإِأُؤُؤَةٌ

出典：池田[1976]、黒柳[1976]を元に筆者作成

だし、古典アラビア語と現代アラビア語とは、「慣用句や単語の意味などの面では相違していても、語形や文法現象など重要な側面では、たいした変化は認められ」[池田 1976: 2] ない。文法は古典から現代そして未来を結ぶ力であり、単一の文法で全時代の作品を読むことができるのはアラビア語の利点であろう。

外国語学習のコツのひとつは対象言語が既知の言語と「どのように」違うのかを知ることである[千野 1986: 14]。以下、相違の仕方に注意しながらアラビア語文法の特徴を見てゆこう。

アラビア語の文章には、名詞で始まる名詞文と動詞で始まる動詞文がある。主語は名詞文では「冒頭」、「起始」(al-mubtada')、動詞文では「行為者」、「能動主体」(al-fā'il) と呼ばれ、用語法からして分かれている [ライト 1987 vol.2: 471]。

名詞文で戸惑うのは、「単に主語と述語からなる名詞文においては、繫辞は用いられない」[池田 1976: 18]という事実である。英語で見慣れたbe動詞がないため、主語と述語<sup>17</sup>の境目が分かりにくい。そこで、入り口として指示代名詞や人称代名詞を主語とした例文が用いられる。代名詞を主語とする文章の代表格は次のとおりである。

① [指示／人称代名詞 性・数]

{ 主語 }

[名詞／形容詞 非限定 主語に一致した性・数]

{ 述語 }

例：これは本です。私は学生です。これは美しいです。

② [指示／人称代名詞 性・数]

{ 主語 }

[名詞 人称代名詞による限定 主語に一致した性・数]

{ 述語 }

例：これは私の本です。こちらは私の母です。

人称代名詞による限定は、人称代名詞の接尾形（非分離形）によって行われる。従って、指示代名詞、人称代名詞の独立系と接尾形、名詞の性と数を身に付ける必要がある。まずは代名詞を習得し、その後に時間を掛けて名詞の性・数に慣れるのが良い。特に接尾形は目的格としても使われるために早期に習熟しておくとなかなかである。また、「誰?」、「何?」といった基本的な疑問詞を覚えれば、会話も行えるようになる。

主語が代名詞でない場合には、主語と述語の切れ目をどのように見分ければよいのか。一般に名詞文の主語は限定名詞で述語は非限定名詞・形容詞である [黒柳 1976: 12; 内木 1989: 131]。通常、非限定の名詞・形容詞にはタンウィーンというウン（主格）、アン（対格）、イン（属格）の音が現れるため、ウンが付いていれば述語であると便宜的に説明されることもある [竹田 2013: 14]。しかし、双数形、男性形規則複数、不規則複数の一部、二段変化の名詞・形容詞、属格により限定された名詞・形容詞はそもそもタンウィーンをとらない。さらに、日本語の振り仮名に当たる母音符合 (shaki) は児童書や外国人向けの学習書のみに記載されるため、タンウィーンに頼った学習法では新聞を読むこともままならない。

ある名詞を形容する語は、その名詞の後ろに置かれた上で限定・非限定、性、数（単数・双数・複数）、格などの外形が一致していなければならない。逆に考えれば、ある名詞の後ろに置かれ外形が一致している語は、当該名詞と同じ集団に属しているわけである。名詞の限定は定冠詞によるか、「私の家」や「その男の家」などの表現に用いられるイダーファ（属格による限定）によって行われる。

③ [名詞 限定 性・数]

{ 主語 }

[名詞／形容詞 非限定 主語に一致した性・数]

{ 述語 }

例：この本は面白いです。彼の家は大きいです。犬というものは(所詮は)

犬である。

- ④ [名詞 限定 性・数] [形容詞 限定 先行名詞に一致した性・数]  
 { 主語 } { } 主部 (主語を形容) { }  
 [名詞／形容詞 非限定 主語に一致した性・数]  
 { 述語 } { }

例：その美しい家は大きいです。彼の美しい家は大きいです。彼の愛犬はロボット犬です。

上記の例③④はいずれも、限定名詞が主語、非限定名詞／形容詞が述語となっている。他方、限定名詞を述語にとりたい場合には次例⑤の様に主語と述語の間に主語に対応する人称代名詞を置く [池田 1976: 81; 牧野 1979: 142; ライト 1987 vol.2: 484-485]。

- ⑤ [名詞 限定 性・数] [形容詞 限定 先行名詞に一致した性・数]  
 { 主語 } { } 主部 (主語を形容) { }  
 [人称代名詞 主語に一致した性・数]  
 { 主語と述語を分ける標識 } { }  
 [名詞／形容詞 限定 主語に一致した性・数]  
 { 述語 } { }

例：その美しい家が、件の家です (直訳：その美しい家、それがその家です)。

以上が「A = B」型の名詞文の基本である。これらの文頭に疑問詞 *hal, 'a* を付け加えれば疑問文となり、「はい」か「いいえ」で答えられる。例えば「あなたは学生ですか」に「はい、私は学生です」ないし「いいえ。私は会社員です」と答えるのであれば、ここまでの知識で十分である。しかし、「いいえ、私は学生ではありません」と答えるのは、アラビア語では意外に難事である。というのも、前述のとおり「単に主語と述語からなる名詞文において

は、繫辞は用いられない」ために文中に否定辞を置くべきがないのである。そこで、laysa という特殊な動詞<sup>18</sup>を用いることになる。ただ、laysa は人称ごとに活用するだけでなく中心にy という弱い音を抱えているために活用が若干複雑である。「～は～ではない」を名詞文で表現できないという驚きが絶望感を招かないよう、動詞文に慣れてから触れる方が良いかもしれない。

英語では存在<sup>19</sup>や所有を示すにはbe 動詞<sup>20</sup>やhave 動詞を用いるが、アラビア語にはこれに直接対応するような動詞がない。そこで、副詞や前置詞を用いる次のような表現を用いるのが一般的である<sup>21</sup>。

⑥ [名詞 限定] [場所を表す副詞]

{ 主語 } { 述語 }

例：その本はここです。

⑦ [名詞 限定] [位置を表す前置詞] [名詞 限定／代名詞]

{ 主語 } { 述語 }

例：その本はそのテーブルの上です。

⑧ [名詞 限定] [所有を表す前置詞] [名詞 限定／代名詞]

{ 主語 } { 述語 }

例：その本は私のです（直訳：その本は私に属する）。

⑨ [動詞 wajada（見出す）の未完了形受動態 yūjadu<sup>22</sup>]

{ 動詞（述語） }

[名詞 限定／非限定]

{ 主語 }

例：本があります。

存在を示すのは⑥⑦⑨、所有を示すのは⑧である。なお、⑥⑦⑧の主語の名詞を非限定にする場合は、述語を先行させる。所有を表現する前置詞とし

ては li (所有一般)、'inda, ladā (家にある)、ma'a (手元にある) が挙げられる [池田 1976: 44]。

次に動詞を見てゆく。まず、アラビア語には不定法がないため、動詞に to be や to write のような「原形」が存在しない<sup>23</sup>。辞書の見出し語は、「彼は～であった／存在した」、「彼は書いた」のように三人称男性単数完了形能動態の意味を必ず持つ。しかし、辞書、教科書、単語帳のいずれも便宜上、「～である／存在する」、「書く」と表記せざるを得ない [池田 1976: 64]。そのため、「見出し語」が三人称単数完了形を意味することが忘却されてしまうので、時

【表4】完了・未完了の時制と相

		時制	相	法性	備考
完了形	基本形	過去	完了	事後的	条件文、祈願を表す決まり文句、遂行動詞、心理・感情動詞に用いられる完了形は時制を表さない
	複合形①	過去	完了		kāna+(qad)+完了形
	複合形②	未来	完了		sawfa/sa- yakūnu+(qad)+完了形
未完了形直説法	基本形	相対的非過去	完了／未完了	概念的	
	複合形①	未来	完了		sawfa/sa- 未完了形
	複合形②	過去	未完了		kāna+ 未完了形
	複合形③	過去における相対的未来	完了		kāna+sawfa/sa- 未完了形
未完了形接続法	基本形	相対的未来	完了	概念的	特定の接続詞の後で目的・可能性・願望内容を表す。または、否定辞 lam を伴い、未完了形直説法複合形①の否定形として用いる
未完了形指令法	基本形①	過去	完了		否定辞 lam を伴い「完了形」の否定形として用いる場合
	基本形②	未来	完了		三人称への命令や一人称への勧誘を表す場合
命令形	基本形	未来	完了		命令を表す

備考：sawfa (sa-)は未来を表す、qad は完了の意味を明示する不変化詞。過去時制を表す補助動詞の完了形が kāna、未完了形が yakūnu である。なお、完了形複合形①・②には“perfect”と記載されており単なる完了とは区別されているようだが、ここでは「完了」に統一した。

出典：近藤 [1999: 109-110] を元に筆者作成

折注意喚起する。

アラビア語の動詞は完了形と未完了形に分けられ、そのテンス（時制）とアスペクト（相）は【表4】のとおり纏められる。これに従えば未完了形が未完了相をとるのは直説法の場合だけであり、接続法、指令法<sup>24</sup>では完了相を示す<sup>25</sup>。従って、「この2分類は、しばしば〈完了〉(Perfect) および〈未完了〉(Imperfect) と呼ばれているが、アラビア語動詞の〈アスペクト〉性について論じる場合には、この呼称は不適切であり、むしろレスリー・マックフォールに従って、(A) を〈接尾型〉、(B) を〈接頭型〉(あるいは前者を〈語尾変化型〉、後者を〈語頭変化型〉) と呼ぶほうがよいように思われる」[矢島 1987: 3-4] との指摘すらある<sup>26</sup>。

そもそも、アラビア語の術語では動詞の完了形は「過ぎ去った」(māqī) 動詞と呼ばれるが、これは行為が生じた時(zaman)が「過ぎ去った」ことを意味しており、常に完了相として用いられる。他方、未完了形は「似通った」(muḍāri‘) 動詞と呼ばれる。これは、名詞語末の格変化(ア/アン、イ/イン、ウ/ウン)と、未完了形の直説法・接続法・要求法による語末変化(ウ、ア、φ<sup>27</sup>)が似ているためとも<sup>28</sup>、名詞の中でも特に能動分詞が未完了形に相似するためともされる[al-Ḥamw 1989: 184]<sup>29</sup>。つまり未完了形動詞は外形が名詞ないし能動分詞に似通っていることに因み「似通った動詞」と呼ばれるのであって、『似通った』との命名と動詞(行為)の時(zaman)との間には全く如何なる関係もない[al-Ḥamw 1989: 184]のである。未完了形という名は体をあらわすとはいえないと説明し、混乱を未然に防ぐ必要がある。

さて、アラビア語は形態論的には屈折語であるが、動詞で始まるのが動詞文であると前述したように、統語論的には少数派のVSO言語(世界の言語の10~20%程度)に属する[郡司 2011: 2; 山本 2002: 85]。完了形の語末の変化は主語を表す代名詞であるとの伝統的な解説は[ライト 1987 vol.1: 82; 榮谷 1997: 103-104]、VSO言語の導入として有効であるし、特に一人称、二人称の場合などに分かり易い。しかし、未完了形の語頭の変化に関しては、伝統语法学はこれを代名詞と見なさず煩瑣な議論を展開する。これは動詞文では主語が動詞に後続するとの原則に忠実な結果であるのだが[榮谷 1997: 105-



107, 108-110]、いたずらに学習者の混乱を招きかねないため、あくまでも西洋アラブ文学を基礎として伝統的アラブ文学の成果は折衷的に紹介せざるを得ない<sup>30</sup>。

名詞文と動詞文の基礎は、人称代名詞（独立系・接尾形）、動詞の活用<sup>31</sup>（完了形・未完了形直説法）の会得であり、教室でも何回も確認する必要がある。ただ、軽減策は必要であり、当初は使用頻度が低い双数形と女性複数形 [竹田 2013: 44] を省略すべきだろう。なぜなら、「貴男／貴女たち二人」、「彼ら／彼女ら二人・それら二つ」を意味する双数人称は使用頻度が低く、他方、女性複数形は「女性のみを示すときに用いられ」 [新妻 2009: 28] 少しでも男性が含まれる集団には男性複数形が用いられるため使用機会が限られるのである。双数形と女性複数形を思い切って省略している入門書もある [竹田 2010: 134, 136-137] <sup>32</sup>。

一般に教科書では人称代名詞の独立系・接尾形、動詞の完了形・未完了形がそれぞれ独立した計4枚の一覧表として纏められるのだが、運用力向上には人称毎に纏めた【表5】が有効であり、暗記用に配付し、個別指導用に裏表に印刷して紙芝居のように活用している。

## 5. 表現

アラビア語の主格、属格、対格もまた、多くの日本人には馴染みがない概念である。だが、格は意味を決める上で重要であり、日本語の「て・に・を・は」に相当する。例えば、「鬼 子供 食べた」では凄惨な想像しか湧かないが、「鬼が 子供と 食べた」とあれば団欒の描写とわかる。このように格の重要性を紹介することで、教師の指導が瑣末主義と誤解されるのを回避する。

アラビア語には本来の副詞、つまり副詞としてのみ用いられる語彙が殆どない。そこで、名詞を用いた副詞的表現が多用されるのだが [牧野 1979: 76-78]、格はここでも主要な働き手である。以下に副詞を例に格の役割を説明する。

①名詞がu音で終わり格変化を行わない場合、副詞と理解される [ライト



あなたたち  
貴男たち  
含、男女混合

أَنْتُمْ / (كُنْتُمْ، ضَرَبْتُمْ)  
تَنْتُمُ (دَرَسْتُمْ، شَرِبْتُمْ، كَبُرْتُمْ)  
تَنْتُمُونَ (تَشْرَبُونَ، تَعْرِفُونَ، تَكْتُبُونَ)

かれ／それ  
彼／其れ

هُوَ / (كُتِبَ، ضَرَبَهُ)  
يُؤْتِي (دَرَسَ، شَرِبَ، كَبُرَ)  
يُؤْتِي (يَشْرِبُ، يَعْرِفُ، يَكْتُبُ)

かのじよ／  
それ・それら  
彼女／  
其れ・其れ等

هِيَ / (كُنْتِهَا، ضَرَبَهَا)  
تَنْتُمُ (دَرَسَتْ، شَرِبَتْ، كَبُرَتْ)  
تَنْتُمُونَ (تَشْرِبُ، تَعْرِفُ، تَكْتُبُ)

かれら  
彼ら  
含、男女混合

هُمْ / (كُنْتَهُمْ، ضَرَبَهُمْ)  
يُؤْتِي (دَرَسُوا، شَرِبُوا، كَبُرُوا)  
يُؤْتِي (يَشْرَبُونَ، يَعْرِفُونَ، يَكْتُبُونَ)

1987 vol.1: 400-401]。これは主語や述語などの文章構成の主要な要素となる主格ではない<sup>33</sup>。

②「前置詞＋名詞・属格」の組み合わせで、場所、時間、状態などを表す[牧野 1979: 76-77]。属格はアラビア語でjarrつまり牽引を意味し、属格の名詞は前置詞に「牽引されている」(majrūr)と見なされている[ライト 1987 vol.1: 326, 388, vol.2: 471]。属格の名詞が「牽引されている」と想像できれば、その前方に注目すべきであることは自明である。他に属格の主な用法としては前述の「イダーファ」があるが、これも属格の名詞が前方の名詞などに係っていく[ライト 1987 vol.2: 380-444]。名詞・属格を見たら前方注意、と指導する。

③名詞・対格を用いる副詞表現は多様であり[池田 1976: 183-187]、以下に主なものを示す。

i)「動詞＋動名詞・対格＋(形容詞・対格)」で動名詞が同族目的語(目的補語)となり強調などを意味する[ライト 1987 vol.2: 97-105]。動詞が省略され動名詞だけで用いられる用例も多く(例: shukran: ありがとう)、さらには動詞が省略されるのがほぼ常態である表現もある(例: ḥaqqan: 本当に、jiddan: 大変に・とても、'ayḍan: 同様に・～もまた)。あるいは、動名詞・対格が省略され、「動詞＋形容詞・対格」が残る場合もある[Ni'mah n.d. vol.1: 69-71]。

ii)「心象に関わる動詞の動名詞・対格」で行為の原因や目的を示す[ライト 1987 vol.2: 231-232]。

iii)「時や場所を示す名詞・対格」で行為の時点・期間・場所・空間を示す[ライト 1987 vol.2: 206-212]。前置詞とほぼ同様の用いられ方をする物も多い(例: ～の前に)[Ni'mah n.d. vol.1: 73-71]。

iv)「動詞＋能動分詞／受動分詞／形容詞／動名詞／実名詞・対格」で行為時の主語／目的語の状態を示す[ライト 1987 vol.2: 212-231]。ただ、動名詞／実名詞は稀用である[Ni'mah n.d. vol.1: 76]。実際には主語の状態を示す「能動分詞・対格」が最頻出である。

v)「実名詞／動名詞・対格」で先行する言葉の曖昧さを補い、計量

尺度や比較の観点を示すのに用いられる [ライト 1987 vol.2: 232-246]。kam sā‘atan? 「何時間？」などがこれに含まれる。

以上の副詞表現の殆どは初級教科書にも出てくるが、使いこなすためには品詞の区別が必要である。アラビア語の品詞は外形的に区別できるため、【表3】を活用する。

副詞の少なさを補うもう一つの方法が、動詞の派生形である。派生形動詞は「動作の行われ方」を示し [牧野 1979: 80-84]、あるいは他言語であれば助動詞によって示される意味を表す [中江 1993: 12]。動詞派生形の主な意味を【表6】に、変化の一覧を【表7】に示した（語根を○○○で併記してある）。派生形の一覧表を見てげんりされることも多いが、派生形には利点も多い。まず、原形の動名詞は多種多様であるが、派生形の場合はほぼ形が決まっている。原形の第二語根の母音はア、イ、ウの何れかであるが、派生形の第二語根母音は型どおりである。何よりも語根に基づいて語彙を増やすことができる。また、一覧表を暗記する際にも、Ⅱ形とⅤ形、Ⅲ形とⅥ形、未完了形と能動分詞（Ⅴ形、Ⅵ形の場合は受動分詞）の外形はよく似ている。

副詞がないだけでなく、アラビア語には助動詞もない [牧野 1979: 84; 中江 1993: 12]。代わりに動詞や辞詞 [西尾 1988: 153-155]、前置詞 + 定冠詞 + 形容詞 [内木 1989: 179-183; 松尾 2013b: 448-457]、前置詞 + 名詞 / 代名詞 [内木 1989: 118-123] などを用いてモダリティ（法性）を表すのだが、ここで重要な役割を果たすのが’anという接続詞 [池田 1976: 90, 232; 牧野 1979: 91]<sup>34</sup>ないし「動名詞の代用をなす不変化詞」 [ライト 1987 vol.2: 46, 242] である。例えば、「私はアラビア語を話せます」という表現は、’anに未完了形接続法を後続させ（例：’an + 「私はアラビア語を話す」）、「私がアラビア語を話すことは、私にとって可能である」となる。あるいは、英語で It is ~ that --- とされる表現も、仮主語をとることなく前置詞 + 定冠詞 + 形容詞 + ’an + 未完了形接続法で表現する [内木 1989: 179-183]。このように、’an + 未完了形接続法はアラビア語の表現にとって重要であり、最近の教科書や単語帳にも独立の項目として纏められている [竹田 2013: 132-134; 師岡 2012: 12]。ここで、’anが「…が~すること」という行為者を含んだ動名詞を形成し主語

【表6】派生形の意味傾向

2. II形 ٱَعْلَ 他動詞化、使役
- ①強意  
 ②MAKE (使役：自動詞の他動詞化<喜ぶ→喜ばす>、  
 他動詞の二重他動詞化<知る→教える(知るようにさせる)>)  
 ③判断・推量・宣言(みなし動詞) ④名詞の動詞化
3. III形 ٱَعَلَ 相手(対象)の存在(同調/対立)
- ①試み、方向性(努力)  
 ②相互性(相手を目的語とする) 誰々と(に)～する(この際に前置詞不要)  
 ③名詞の動詞化
4. IV形 ٱَعْلَ 他動詞化、使役
- ①MAKE (使役：自動詞の他動詞化<走る→走らせる 座る→座らせる>、  
 他動詞の二重他動詞化<知る→(何かを)知らせる>) cf. II形  
 ②名詞の動詞化 <朝 → 朝になる、～になる>
5. V形 ٱَعَلَ 第II形の意味の再帰(+時間・努力)
- ①第II形の再帰形、受身 ②名詞の動詞化  
 ③自己主張、自己推量 <大きい→自己を偉大だと思う、うめばれる>
6. VI形 ٱَعَلَ 相互作用(行ったり来たり)
- ①第III形の再帰形(自ら～する) ～のふりをする(騙す → 騙されたふりをする)  
 ②相互作用 (互いに～する) 通常主語が双数ないし複数形をとる
7. VII形 ٱَعَلَ 受身
- ①基本形の再帰形ないし受身  
 但し、意味合いは受身(例：壊される)よりも、自動詞に近い(例：壊れる)
8. VIII形 ٱَعَلَ はっきりした意味傾向なし
- ①基本形の再帰形(自ら～する) 他動詞の自動詞化  
 ②相互作用(VI形) ③受身 ④自分のために～する ⑤原型と同意 ⑥抽象化
9. IX形 ٱَعَلَ 色の変化
- ①色・肉体上の欠陥を示す  
 ※四語根動詞の派生形はIX形と似る
10. X形 ٱَعَلَ <原型や語根の意味>を求める ASK
- ①第IV形の再帰形(自ら～する) ②判断評価、推量 (～と思う、みなす)  
 ③懇願・依頼 ④名詞の動詞化 (～にする、～に任命する、～化する)  
 ⑤意志・決断

出典：太田敬子先生の講義録、池田[1976: 107-116]、黒柳[1976: 116-149]、竹田[2013: 100-119]、ライト [1987 vol.1: 47-70]、新妻 [2009: 156-183] を参照し、筆者作成

【表7】派生形変化表

	完了形	未完了形	命令形	動名詞	受動態 完了形	受動態 未完了形	能動分詞	受動分詞
第2形 II	فَعَلَ فَعَّلَ	يُفَعِّلُ يُفَعِّلُ	فَعِّلْ فَعِّلْ	تَفْعِيلٌ تَفْعِيلٌ	فُعِّلَ فُعِّلَ	يُفَعَّلُ يُفَعَّلُ	مُفَعِّلٌ مُفَعِّلٌ	مُفَعَّلٌ مُفَعَّلٌ
第3形 III	فَاعَلَ فَاعَّلَ	يُفَاعِّلُ يُفَاعِّلُ	فَاعِّلْ فَاعِّلْ	فَاعِلٌ مُفَاعَلَةٌ مُفَاعَلَةٌ	فُوِعِّلَ فُوِعِّلَ	يُفَاعَّلُ يُفَاعَّلُ	مُفَاعِّلٌ مُفَاعِّلٌ	مُفَاعَّلٌ مُفَاعَّلٌ
第4形 IV	أَفْعَلَ أَفْعَّلَ	يُفَعِّلُ يُفَعِّلُ	أَفْعِّلْ أَفْعِّلْ	إِفْعَالٌ إِفْعَالٌ	أَفْعِّلَ أَفْعِّلَ	يُفَعَّلُ يُفَعَّلُ	مُفَعِّلٌ مُفَعِّلٌ	مُفَعَّلٌ مُفَعَّلٌ
第5形 V	تَفَعَّلَ تَفَعَّلَ	يَتَفَعَّلُ يَتَفَعَّلُ	تَفَعَّلْ تَفَعَّلْ	تَفَعُّلٌ تَفَعُّلٌ	تُفَعَّلَ تُفَعَّلَ	يُتَفَعَّلُ يُتَفَعَّلُ	مُتَفَعِّلٌ مُتَفَعِّلٌ	مُتَفَعَّلٌ مُتَفَعَّلٌ
第6形 VI	تَفَاعَلَ تَفَاعَّلَ	يَتَفَاعَّلُ يَتَفَاعَّلُ	تَفَاعَّلْ تَفَاعَّلْ	تَفَاعُلٌ تَفَاعُلٌ	تُفَوِّعِلَ تُفَوِّعِلَ	يُتَفَاعَّلُ يُتَفَاعَّلُ	مُتَفَاعِّلٌ مُتَفَاعِّلٌ	مُتَفَاعَّلٌ مُتَفَاعَّلٌ
第7形 VII	اِنْفَعَلَ اِنْفَعَّلَ	يَنْفَعِّلُ يَنْفَعِّلُ	اِنْفَعِّلْ اِنْفَعِّلْ	اِنْفِعَالٌ اِنْفِعَالٌ	/	/	مُنْفَعِّلٌ مُنْفَعِّلٌ	مُنْفَعَّلٌ مُنْفَعَّلٌ
第8形 VIII	اِفْتَعَلَ اِفْتَعَّلَ	يَفْتَعِّلُ يَفْتَعِّلُ	اِفْتَعِّلْ اِفْتَعِّلْ	اِفْتِعَالٌ اِفْتِعَالٌ	اِفْتَعَّلَ اِفْتَعَّلَ	يُفْتَعَّلُ يُفْتَعَّلُ	مُفْتَعِّلٌ مُفْتَعِّلٌ	مُفْتَعَّلٌ مُفْتَعَّلٌ
第9形 IX	اِفْعَلَّ اِفْعَلَّ	يَفْعَلُّ يَفْعَلُّ	اِفْعَلِّلْ اِفْعَلِّلْ	اِفْعَلَالٌ اِفْعَلَالٌ	/	/	مُفْعَلِّلٌ مُفْعَلِّلٌ	/
第10形 X	اِسْتَفْعَلَ اِسْتَفْعَلَ	يَسْتَفْعِلُ يَسْتَفْعِلُ	اِسْتَفْعِلْ اِسْتَفْعِلْ	اِسْتِفْعَالٌ اِسْتِفْعَالٌ	اِسْتَفْعِلَ اِسْتَفْعِلَ	يُسْتَفْعَلُ يُسْتَفْعَلُ	مُسْتَفْعِلٌ مُسْتَفْعِلٌ	مُسْتَفْعَلٌ مُسْتَفْعَلٌ

出典：黒柳 [1976: 118-119] を参照し、筆者作成。

となっている事実が十分に理解される必要がある。これを理解すれば、「…が～することは義務である」、「…が～することは望ましい」、さらには「私は…が～する事を望む」などの諸表現も腑に落ちることだろう。

## 6. 終わりに

以上、駆け足でアラビア語の特徴を見てきた。確かにアラビア語の壁は高いかもしれないが、その内側には独自の世界が広がっている。教科書の著者もアラビア語の特質を知悉しつつも、アラビア語論に大きく紙幅を割く余裕はない。授業中に諸特徴を概説することは、その間隙を埋め、より体系的な知識にする試みである。また、誠実な著者の教科書は情報過多になりがちであり、個々の学習者の進度に合わせた取舍選択と反復学習が重要である。アラビア語には自学自習に適した参考書もなく、学生は「何が判らないのかが判らない」という事態に陥りがちである。学習者の自助努力に過度の期待を寄せることは禁物であり、教師の側が励まし寄り添う姿勢を示さなければならない。少人数授業は個別指導のためにある。

また、日本語の研究が「国語」から「日本語学」となったように、外国人学習者の素朴な疑問や間違いは学問の進歩をもたらす。教師は教えることによって教えられるのであり、目の前の学習者は貴重な素材を提供してくれる。最後に、大学は学校と実社会との汽水域であり、守られた存在であるうちに大海原を泳ぐ力を身に付けてくれることを切に望む。

## 注

- <sup>1</sup> <https://fam.state.gov/fam/03fam/03fam3910.html> (2017年10月20日閲覧)。
- <sup>2</sup> 本学広報サイトにも「第2外国語」との記述がある。cf. <http://decs.nufs.ac.jp/education>, <http://lg.nufs.ac.jp/aboutus/> (2017年12月26日閲覧)。
- <sup>3</sup> [https://www.nagoyagaidai.com/plp\\_special/](https://www.nagoyagaidai.com/plp_special/) (2017年10月21日閲覧)。
- <sup>4</sup> [http://www.paj.gr.jp/statis/data/data/2017\\_data.pdf](http://www.paj.gr.jp/statis/data/data/2017_data.pdf) (2017年12月30日閲覧)。
- <sup>5</sup> 人工知能の効用と限界については川添 [2017] 参照。
- <sup>6</sup> <https://www.buzzfeed.com/jp/eimiyamamitsu/fumio-iwai>。なお、同大使の知名度は本邦よりもイラクに於いて高く、ウィキペディアのアラビア語版 ([https://ar.wikipedia.org/wiki/%D9%81%D9%88%D9%85%D9%8A%D9%88\\_%D8%A5%D9%8A%D9%88%D8%A7%D9%8A](https://ar.wikipedia.org/wiki/%D9%81%D9%88%D9%85%D9%8A%D9%88_%D8%A5%D9%8A%D9%88%D8%A7%D9%8A)) 及び英語版 ([https://en.wikipedia.org/wiki/Fumio\\_Iwai](https://en.wikipedia.org/wiki/Fumio_Iwai)) に立てられている項目が、日本語版にはない (2017年10月22日閲覧)。
- <sup>7</sup> 歴史的には「多くのアラブ諸国では、二〇世紀半ば過ぎまで、エリート知識層とその家族が得意とする外国語はフランス語だった。(略) 英国が治めた国でもそうだった。(略) あるエジプト人の邸宅では、召使いとはアラビア語なのに、家族同士はフランス語で会話していた。(略) とところが、一九六〇年代ごろから状況は変わりはじめ、英語が優勢と



- なる。(略) 英語の能力も落ちはじめた。(略) 自国にある (または新設された) 大学で学位を取る者が増えはじめたからである」[板垣 1998: 225-226]。この歴史は、文明開化以後の本邦学生の外国語力の上下とも符合する。
- 8 ただし著者は、アラビア語が「特殊言語」に含まれる現状に異を唱えている [千野 1986: 211]。
- 9 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/bluebook/2004/hakusho/h16/html/G2600200.html>, <http://www.mofa.go.jp/policy/other/bluebook/2004/chap2-f.pdf> (2017年12月30日閲覧)。
- 10 <http://www.aa.tufs.ac.jp/i-moji/what/kihan.html> (2017年10月20日閲覧)。
- 11 書き順を示す動画の活用も一考したいのだが、例えば<https://www.youtube.com/playlist?list=PL6vzhRnQwxF6CPjWYqcN2D3Wgr4UuOvQO> (2017年10月25日閲覧) は書き順を色分けする点で優れているが、hの語中形の書き方は独創的に過ぎるため扱いに注意が必要である。
- 12 例えば、<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/ar/pmod2/index.html>, <http://el.minoh.osaka-u.ac.jp/flc/ara/index.html> (2017年11月1日閲覧)。
- 13 広く用いられている大塚 [2002] の転写法は、t, ṭ, d, qが母音を伴わない子音および語末の子音である場合にト、ドと表記するよう定めており [大塚 2002: 10-11]、ワジャドタとの表記はこれに倣ったのであろう。
- 14 本邦ではアラビア語の文法用語は著者毎にまちまちであり、統一された用語法は存在しない。本稿では主に池田 [1976] と黒柳 [1976] の用語法に従った。なお、基本的用語法を比較した一覧表が小杉 [2009] にある。
- 15 なお、fa'īlun型の例にもそれぞれ「大きくある・なる kabura」、「小さくある・なる ṣaghura / ṣaghira」、「美しくある jamula」という動詞がある。また、'af'alu型形容詞の語根からは「～色になる」という動詞 (派生形第IX形) が作られる。
- 16 比較級と最上級は一括りに「優劣表示名詞」と呼ばれる [池田 1976: 157]。
- 17 名詞文の述語・述部は「情報」、「告知」、「言明」(khabar) と呼ばれる [ライト 1987 vol.2: 471]。
- 18 名称としては不完全動詞 [池田 1976: 149]、否定動詞 [榮谷 2016: 75] などがある。中江はkānaと同類のlaysaを修辞動詞と呼んでいる [中江 1993: 11-12, 17-18]。
- 19 アラビア語で「存在」はウジュードといい、「何かを発見する、あるいは何かを知るといふ基本的意味を持つ語根wdjに関連したアラビア語である」[ナスル 1988: 209]。
- 20 不完全動詞のkānaは補語をとる場合に繫辞のように機能し、補語をとらなければ存在を示すことがある。また、完了形では過去の事実を、未完了形では未来を示す [池田 1976: 76]。したがって、アラビア語の中では最もbe動詞に似た働きをされると思われるが、一般的な繫辞が主語と述語の間に置かれるのに対しkānaは主語 (ism kāna) よりも先に置かれること、現在の事実を示すには用いられないこと、補語 (述語 khabar kāna) を対格にする必要があることなどから繫辞との差異も大きい。また、名詞文の文頭にinnaという小辞が置かれる場合もあるが、「本来の機能は、それが文頭に置かれることによって、次にくる文に聞き手の注意をうながすことであった」[牧野 1979: 149] とされ繫辞とは見なされない。innaには「見よ」の意味合いが残存しているため、その主語 (ism inna) は対格となる [ライト 1987 vol.2: 144]。因みに、アッラーによる天地創造はクルアーン

- (コーラン)においてはkānaを用いて表現されており、「『あれ』と仰せられれば、それはある」(2章117節、3章47, 59節、6章73節、16章40節、19章35節、36章82節、40章68節)との描写に出てくる、「あれ」というのがkānaの命令形、「それはある」というのが未完了形である。
- <sup>21</sup> 詳しくは松尾 [2013a] 参照。
- <sup>22</sup> 他方、完了形 (wujida) が用いられると「見出された」、「発見された」の意味になる (Dr. Muḥammad Jabāšīnī の御教示による)。
- <sup>23</sup> アラビア語教科書中にある「動詞の原形」は、辞書の見出し語を意味する場合 [黒柳 1976:44] と、「動詞には、原形と派生形がある」 [池田 1976: 64] とあるように「派生形の元になる原形」を意味する場合があります、英文法における「動詞の原形」とは意味合いが違う。
- <sup>24</sup> アラビア語教科書では要求法、短形などと表記されるのが一般的である [小杉 2009: 89]。
- <sup>25</sup> 未完了形接続法および希求法 (要求法) が「なんらかの程度の可能性、不確実性を含」む用法であるとの分析もあるが [牧野 1979: 91-92]、少なくとも希求法がlamを伴った場合には当てはまらない。
- <sup>26</sup> 日本語学では誤解を招かぬようにル形、タ形、テイル形などの用語を用いている。例えば、タ形には過去と完了の両方の意味がある [井口 1994: 59; 庵 2012: 147] ため、過去形と呼ぶと混乱を招きかねないため、より外形的な用語を用いている (中北 美千子先生の御教示による)。また、尾崎明人先生による日本語学入門講義から様々な示唆を得た。
- <sup>27</sup> φ はゼロであり、円唇前舌半狭母音 (ø) ではない。
- <sup>28</sup> アラビア語では名詞の格変化も未完了形動詞末尾の変化も共にイウラーブと呼ばれる [榮谷 1998: 93]。
- <sup>29</sup> 未完了形と能動分詞の相似は派生形の場合に顕著であり、II 形であれば yufa‘ilu と mufa‘ilun、III 形であれば yufa‘ilu と mufa‘ilun、IV 形は yuf‘ilu と muf‘ilun、VII 形は yanfa‘ilu と munfa‘ilun、VIII 形は yafta‘ilu と mufta‘ilun、IX 形は yaf‘allu と muf‘allun、X 形は yastaf‘ilu と mustaf‘ilun となる。他方、V 型と VI 型では受動分詞に相似し、各々 yatafa‘alu と mutafa‘alun、yatafa‘alu と mutafā‘alun となる。
- <sup>30</sup> 伝統文法学に通じている邦人著者による教科書でも西洋文法学に依拠した記述が中心である。他方、四戸 [1996] のように伝統文法学に依拠した教科書もあるが、未完了形の主語を表す代名詞の問題については触れていない [四戸 1996: 201-207]。
- <sup>31</sup> 伝統的文法学では、完了形の場合は「動詞・接続代名詞」、未完了形の場合は「小辞・動詞・代名詞」と分析するため活用と呼ばず、さらに「隠れた代名詞」を仮想するなど複雑であるため [榮谷 1997: 103-107, 109-110]、完了形・未完了形を一括して扱える活用 (動詞の屈折) として紹介する方が学習者の混乱を招かない。
- <sup>32</sup> なお、双数形と三人称男性複数形が男女混合の場合にも用いられる旨明記している入門書もある [アルモーメン 2014: 86-87]。
- <sup>33</sup> 池田 [1976: 234] にある主格との表記は外形の描写である。
- <sup>34</sup> 辞詞 (ḥarf) には「前置詞・接続詞・副詞および副詞的名詞対格・間投詞などがひろく含まれている」 [池田 1976: 224]。

## 参考文献

- アルモーメン アブドーラ, 2014『カラー版 アラビア語が面白いほど身につく本』本田孝一監修, KADOKAWA.
- 庵 功雄, 2012『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第2版』スリーエーネットワーク.
- 井口 厚夫・井口 裕子, 1994『日本語文法整理読本—解説と演習』名柄 迪監修, バベルプレス.
- 池田 修, 1976『アラビア語入門』岩波書店.
- 池田 修, 1992「アラブの諺」永井道雄監修、板垣雄三編『新中東ハンドブック』講談社.
- 板垣 雄三, 1998「ヨーロッパに学ぶ、ヨーロッパが学ぶ —モダニスト—」大塚 和夫編『アジア読本 アラブ』河出書房新社.
- 伊藤 俊太郎, 2006『12世紀ルネサンス』講談社.
- 伊藤 俊太郎, 2007『近代科学の源流』中央公論新社.
- 江村 裕文, 2015「アラビア語学習者のために」『異文化. 論文編』第16号, 法政大学国際文化学部.
- 大塚 和夫他編, 2002『岩波イスラーム辞典』岩波書店.
- 小川 芳男・前田 健三, 1989『語源を中心とした英単語の力のつけ方 —楽しく英単語を覚えよう—』有精堂出版 (初版は1976年).
- 川添 愛, 2017『働きたくないイタチと言葉がわかるロボット —人工知能から考える「人と言葉」—』朝日出版社.
- 黒柳 恒夫・飯森 嘉助, 1976『アラビア語入門』泰流社.
- 郡司 隆男, 2011「日本語はどんな言語か? —類型論的観点からの日本語—」『Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin』第14巻, 神戸松蔭女子学院大学学術研究会.
- 小杉 泰・岡本 多平・竹田 敏之, 2009「日本におけるアラビア語教科書と文法用語 —教育戦略と基本用語の邦訳をめぐって—」『イスラーム世界研究』第2巻2号, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属イスラーム地域研究センター.
- 近藤 智子, 1999「アラビア語の条件文における時制を表す動詞複合形について」『言語研究』115巻, 日本言語学会.
- 榮谷 温子, 1997「活用語尾か代名詞か —アラビア語の接続代名詞をめぐって—」『言語・地域文化研究』第3号, 東京外国語大学大学院.
- 榮谷 温子, 1998「アラビア語と外国語教授法」『地域文化研究』第2号, 東京外国語大学大学院地域文化研究会.
- 榮谷 温子, 2016『はじめましてアラビア語』第三書館.
- 四戸 潤弥, 1996『現代アラビア語入門講座』2 vols., 東洋書店.
- 鈴木 董, 2000『オスマン帝国の解体』筑摩書房.
- 隅田 英一郎, 内田 麻理香, 2017「英語を勉強しなくてもいい時代がやってくる? —自動翻訳が拓く未来—」『中央公論』8月号.
- 竹田 敏之, 2010『ニューエクスプレス アラビア語』白水社.
- 竹田 敏之, 2013『アラビア語表現とことんトレーニング』白水社.
- 千野 栄一, 1986『外国語上達法』岩波書店.

- ・東長 靖, 2002「アラビア文字による他言語表記とアラビア文字文化圏」『上智アジア学』第20号.
- ・内木 良一, 1989『くわしいアラビヤ語』大学書林.
- ・中江 加津彦, 1993「アラビア語の修辞動詞について」『言語学論叢』特別号 松本克己教授退官記念論文集, 筑波大学一般応用言語学研究室.
- ・ナスル サイド・H, 1988「イスラーム思想における『存在』(wujūd)と『本質』(māhiyyah)」井筒 俊彦・三浦伸夫訳, 井筒 俊彦等編『岩波講座 東洋思想』第4巻, 岩波書店.
- ・新妻 仁一, 2009『アラビア語文法ハンドブック』白水社.
- ・西尾 哲夫, 1988「『能力表現』の語用論: 日本語とアラビア語の対照研究」『言語学研究』第7巻, 京都大学言語学研究会.
- ・西尾哲夫・中道静香, 2002「日本におけるアラビア語研究文献目録」『国立民族学博物館研究報告』第26巻3号.
- ・牧野 信也, 1979『アラブ的思考様式』講談社.
- ・松尾 愛, 2013a「アラビア語(データ:「所有・存在表現」)」『語学研究所論集』東京外国語大学語学研究所.
- ・松尾 愛, 2013b「アラビア語(データ:「補遺」)」『語学研究所論集』東京外国語大学語学研究所.
- ・三上 喜貴, 2017「データが示す世界の中の日本語 —日本語は普遍語になりうるか—」『中央公論』8月号.
- ・水村 美苗, 2017「言語の植民地化に日本ほど無自覚な国はない —中途半端な英語より、一葉を読む豊かさを—」『中央公論』8月号.
- ・師岡 カリーマ・エルサムニー, 2012『これなら覚えられる! アラビア語単語帳』NHK出版.
- ・矢島 文夫, 1987「アラビア語のいわゆる〈アспект〉について」『学習院大学言語共同研究所紀要』第10号.
- ・山本 秀樹, 2002「世界諸言語の語順類型研究における諸問題 —地理的・系統的語順分布に対する研究序説—」『人文社会論叢 人文科学篇』第7号, 弘前大学人文学部.
- ・ライト W, 1987『アラビア語文典』後藤三男訳, 2 vols., ごとう書房.
- ・al-Ḥamw, Aḥmad, 1989, *Muḥāwalah Alsunīyah fī al-A'lāl*, 'Ālam al-Fikr, vol.20, no.3, Kuwait: Wizārah al-I'lām.
- ・Ni'mah, Fu'ād, n.d., *Mulakhkhaṣ Qawā'id al-Lughah al-'Arabīya*, 2 vols., 9th ed., n.p.